

僕のひとりごと

夢のつづき

僕はよく夢をみる、映画館で映写技師をしていた頃の、時代はまだまだ映画全盛期と言うか映画館全盛期、そしてなにより映画をフィルムで映していた、映画を映す人を映写技師と呼ばれていた"映写技師は見ていた"

映画のフィルムは何巻に分けられて、アルミの缶又はプラスチックの円いケースに入れて送られてきたものをつなぎリールと呼ばれるものに巻いて2台の映写機で切り替えて、映すというもの、一その夢は回っていた映写機のリールが高速で回りだしフィルムが僕に向かって飛びだしおそいかかってくる!

"復讐するは我にあり" 一映画館に20年勤めていた、辞めてから数年、あの頃のことか、今も胸をはなれないのになぜだろう、

誰にでも心に刻まれた忘れられない場所がある、僕にとってあの場所(映画館)は心に刻まれた忘れられない場所であり、パラダイスだった、そうニュー・シネマパラダイス。

第4回路上文学賞

応募作品

「僕のひとり言 夢のフブキ 山島 弘 (HIROSHI)

夢のフブキ 山島 弘

「これは僕の夢のフブキ」

夢のフブキ 山島 弘

講評（星野）

前回の作品「僕のひとりごと 夢」の続編ですね。今度は記憶自体が、いろいろな映画作品になっています。フィルムが襲いかかってくる夢は、想像するとかなり怖いです。映写技師ならではの夢ですね。廃館になった映画館を舞台にしたホラーを想像しました。前回のコメントでぼくが言及した「ニュー・シネマ・パラダイス」で最後が締めてあるのも、ナイス！